# ウィリアム・ジェームズの宗教論 (1)

## Sound Mindedness への一考察

鈴　木　　孝

by Takashi Suzuki

## Religion of William James (1)

## A Study concerning Sound Mindedness

James began his study of religion from the very point where D. Hume's analyisis of understanding came to dead lock. On the other hand G. Santayana recognized that the imagination is the great unifier of humanity. What James called "sound mindedness" will be synonimous with Santayana's imagination.

Saund mindedness is the feeling that Nature is absolutedly good, that is the poetic fiction. Another type of religios feeling is called the sick soul, which is based on the permission that the evil aspects of our life are of its very essense. Both must be unified in the Self. I will illuminate the feeling of human nature by grouping, comparing, and analyzing the "Sound Mindedness".

### (1)

イギリス経験論哲学者ヒュームの知識論は次の結論をもった。即ち「われわれのすべての別個の知覚は別個の存在である」ということ，さらに「私達の心は別個の存在間にいかなる真の結合をも知覚しえない」ということ，この点にヒュームの探求は帰結したのである。彼の知識論の根底をつらぬく分析的態度から生じたものは，上にのべた不毛の世界である。しかし，また，この分析の奥に想像 imagination という機能が働いているということ，またその働らきがあり，はじめて観念は結合の可能性を持つのだともみなされていたのだ。むしろ，想像力こそ，ヒュームにとって欠くことのできない機能であったはずである。それは，事実としての現在印象や，それに由来する諸観念の機能を助けるものとしての「想像」である。ヒュームは想像を積極的な意味において，事実の連続性，人格の同一性の根拠にはなりえないものと考えていた。実にヒュームのいう観念と観念の連合，移行などが経験と習慣を媒介にして，信念 belief にと到る過程そのもののなかに，ある時は強く，時には弱く「想像」がかくされているのである。ヒュームは結論として想像に消極的な意味しかあたえていない。彼の立場では当然である。バラバラの諸観念と想像は結びつけて考えられることはなかった。しかし，われわれは imagination によって，ヒュームをみなおしてみるとき，興味ある結果が得られるかも知れない。

ここでジェームズに入っていこう。なぜなら「想像力」のような生きた流動体こそ，ジェームズにとって最も vivid な対象であり，出発点であるから。ウィリアム・ジェームズは，自分の立場を次のように言う。根本的経験論者とは多元なる状態が世界の恒久的な形態であるという仮説を持っ

ているものだと。彼のいう「生きた仮説」living hyposesis である。即ちジェームズはわれわれのできあがった知識を取りあげ，検討，分析する前に vivid に与えられている体験を実感として受けとめたわけだ。ラデイカル（根本的）とは絶対に否定しえない経験の事実ということだ。そこでは帰納より演繹が，理性より感情が，知識よりは行為が優先し，「意識の流れ」を大前提とすることで，プラグマ（行為）の思想としての生き生きしたビジョンを持つことができた。ジェームズは論理的思考を直観におきかえ，現実という城を多元論の平地に設けたことによって一そうの普遍性をもちえたのでもある。ヒュームは皮肉なことに論理的分析の結果，「想像」という不名誉な，至極便利な機能を認めざるをえなかった。ジェームズにとって，想像の不可思議な綜合性こそ連続的意識の存在証明に他ならないであろう。逆にヒュームの論理的整合性が期せずせして産出した「想像」こそ，ジェームズの出発点となったのである[1]。

## （2）

ジェームズの多元的宇宙観は，自我の基体としての意識の流れと，有限で可能的な世界と，それを超える未知なる世界への感受能力と，そこからの緊張度から成り立つといえよう。特に未知なるもの，永遠なるものへの自己の対決が強いられ，「この自然界は窮極のものではなくて，多元的構造である宇宙の単なる印か影またはその外側の台であり，そこでは精神的な力は最終の決定権をもっているし，永遠なのである」[2] という確信こそ，彼の「生きた仮説」である。ジェームズはこの感情の要永を「will to believe」で擁護し，その内容を「宗教経験の多相」the varieties of religions experience で分析しているのである。ジェームズの宗教論では，神についての神学上の解釈は問題として提出されない。概念としての「神」「宗教」を，理論的に体系的に分析するのではなく，life に重要な機能を果す宗教的感情 religions feeling，宗教的な衝動 religions impuls が事実として，提出され分類されているにすぎない。

ここでジェームズの宗教論が実は「宗教的感情」を指していることから，宗教的ということを彼の後継者であるサンタヤナがどのように考えていたかを少しく検討してみたい。ジョージ・サンタヤナは宗教を詩と関連ずけ次のように言う。「宗教と詩は本質的に同じであり，実際面 practical affairs と結びつく方法が単に異なるのみである。詩はそれが生活に介入したとき宗教と呼ばれ，宗教が単に生活に附随したとき，まさに宗教は詩になるのだと思う」と[3]。彼は現実を，こうも述べる。「自然に波動する無限なる力 influence の一小部分を集める五感，これら感官を理解する悟性の中和された力，そして悟性の理解したものにメッキする情熱の空想，これらが人間の天賦だ」[4]。かくて最も広く最も奥深い現実把握は想像の機能による他ないとされる。ヒュームの分析にて，影をひそめていた想像はここでは中心に位する。窮極的に想像は宗教的感情と同義のものとみなされている。ジェームズの宗教論を考察する手がかりとしたく，サンタヤナをもうしばらくみてみよう。「宗教は人生の道しるべになった詩でありそれは最高の実在へ接近するものとして科学の代用となった詩であり，また科学につきそっておこる詩である。詩はさまようことを許された宗教である。それは行動への適用のあてもない。それは威厳と教義をよそおって表現されてもいない。詩は，実際的な効力もなく，また形而上学的幻想ももたぬ宗教である。しかし詩のこのような抽象性の基礎は，一般に狭い範囲にすぎない。詩人は半時間，着想をもてあそび深遠な道徳的意味をもたない文字を構成し，自分の思想を忘れ，安逸の虚構としてのみ，それを想う。なぜなら，彼は自分の生命のかくれた源泉にうちふれるほど充分に深く掘り下げることがないから。しかし，彼が舞台をひろめ，そのラプソディに彼の隣人や自分の魂に関する真のビジョンをあたえるときに，彼の詩

は最強の確信の聖化となり，彼の宗教をもつすべての真理を含んでいるのである。世俗の宗教が詩人の宗教に加えるものは，不活発なかぎられた理解にすぎない。この理解は詩人が理念として考えていたものを字ずらで理解し，道徳の地平での道徳の真の理解であったものを，自分の水準で，この世界における誤った広まりへとひきおろしてしまう。このより高い地平が意味深い imagination の領域であり，かくことのできない fiction の領域，背後にかくされた実在の把握にふさわしき idealism の領域である。最高度の能力にまで高められた詩は，そのとき，最奥の真理において把握された宗教と同一である。それらの統一点において，両方ともがその最大の純粋性と博愛に到達する。なぜならば，その時，詩は軽卒さを失い，堕落を止め，宗教は幻影をすて欺くことを止めるからである[5]。」以上小論には長すぎる引用が続いたが，要するに宗教はその本質において，あくまで自己を凝視し，否定し，自己をのりこえ，そのことによって自己を無限に拡大していこうとする努力に他ならないであろう。詩は宇宙的背景 cosmic setting を本質的に，みずからに含むことによって，宗教と同一のものになってしまう。宗教とは生活に介入された cosmic setting としての詩にほかならないというのがサンタヤナの考えであろう。彼の詩的な思想はロゴスを超えたもののであり，概念をこえたものである。存在を包括するものとして自己と世界との間の波動を，即ち生きた世界の琴線を，言語と体系によって破壊してしまうのを危惧し無形的表現をとらざるを得なかった。非常に比喩的で捉えにくい彼の表現そのものが一つの詩として展開される。まとう者のいない衣裳屋の衣裳陳列は奇異なナンセンスである。前記の宗教と詩の合致する次元は「自分の生命のかくれた源泉にふれるほど深い詩」においてみられ，人生にかくことのできない fiction である。詩の機能は因習的な，諸観念の裏にひそむ実在の感動的な把握ということである。実在としての現実の根底を洞察することは同時に無限なる延長への飛躍であり，超越的なるもの transcendental でなくてはならない。そのような本質の直視こそ，彼のいう cosmic setting なる地平での詩であり，詩というよりも宗教的感動と緊張をもつものであるということと解釈してよいであろう。もとよりここでいう詩と宗教の近接性の指摘は，すべての宗教的存在と同一のものというには早急であろう。宗教そのものにみられる自己否定，絶対の帰依，献身によって義とせられんがための果てしなき自己の神による制裁をそのまま詩と，あるいは cosmic setting を持つ詩といえば，それで足りるであろうか。サンタヤナが両者の類似点を考察するためには，広義な宗教的感情が対称とならなくてはならない。あるいは，宗教が多面な要因を含むことを暗示しているともいえよう。

## (3)

前章にてサンタヤナの詩と宗教の世界を考察したが，宗教心情は拡散して多面なるものとして考察さるべきものであることをジェームズは「宗教論」で暗示しているともいえよう。サンタヤナは直覚として詩的表現の最深部に入りこみ，本質の世界に深くつき入って，二度とその扉をひらくことがなかったわけである。

ジェームズの著作のなかで数多く宗教的なる規範は取扱われている。ここでは the varieties of religions experience をもとに考えてみよう。ジェームズはある婦人への手紙に次のようにのべている。私の自から設けた問題は困難なものであり，私の「宗教論」は次の点で大切なものだと二つの点を特に指摘する。第一に，世間の宗教的生活の中心である宗教経験を哲学から防ぎ守ること，第二に，個々の啓示や教義が不合理であっても宗教的生活は，人類の最も重要な機能であること，以上の二点である[6]。彼の「宗教論」の内容は神についての教義解釈ではない。amatter of fact としてのそれがジェームズに関心を与えたのである。その意味では根本的経験主義であり，方法とし

ては心理主義であり，価値はプラグマに移行される。ジェームズにとって，抽象化された概念はより具体的な，生における第一義的なものから疎外されたものであり，代用されるものに過ぎない。もともと抽象化されるのが概念の宿命的機能であるなら，最も抽象的な「神」の概念はジェームズにとって最も遠いものでなくてはならない。彼にとって単なる概念操作は無意味にちかい。ある人間にとって有効であり，vivid なるものは，それこそジェームズにとって唯一の価値基準である。そのような宗教感情がどこから，どのようにして生まれるのかという問題提起は直接にはみられない。事実の報告が主である。強いてジェームズが答えるのならそれは，心理学の領域においてであろう。

ジェームズは二つの相反的にして，対称的な「宗教心情」を指摘する。即ち健全な精神作用 healthy mindedness と病める心 sick soul の両者である。

健全なる精神としての宗教をジェームズは次のようにみる[7]。神が自分と自分の近くにいると想うことで，このうえもない喜悦と幸せを感受する心である。この態度は自然を信じさえするなら絶対にそれは善であり，自然のなかに神の影をみることができるとするものでもある。自己は本質上罪悪感とは全く離脱している場合が主だ。自己はそのまま神と合一しえてなんら矛盾を感じないのである。ジェームズはいう。sound mindedness を育成することは人間性の重要な傾向と一致しているのである，と。これに属するものはホイットマンであり，エマーソンである。宇宙における無限の生命と力を信じ，自己をそれらと同一化できる精神である。それは場合によっては汎神論的である。当然，神とわれわれの間にへだたりはないのである。ジェームズはかかる精神作用は絶体に必要であることを認めているのだ。「healthy mindedness を宗教態度として体系的にはぐくむことは，それ故，人間の重要な傾向と調和するものであって，すこしも不条理なことではない」と[8]。このような拡散的な宗教心がパーソナリティ形成の要因として働らくことを認めているのである。ジェームズ流にいうなら，human nature を支える意識の流れそのもののなかに，常に変化し，次の局面に発展する直接体験そのもののなかに，このような拡大していく自我を認めざるをえないのである。

さて，ここでハリソンの古代人の宗教感情の分析を参照してみよう[9]。なぜなら最も素朴な意味での sound mindedness こそ古代人の唯一の精神作用と考えることができるかも知れないから。古代人は自分の行動によってその意図したものを充足しようとした。即ち祈るのでなく行動において祈るのである。次に祈りは呪術としての舞踊 magical dance を生む。雨や風や太陽を欲する magical dance である。種属として行なわれるとき，それは強化され，共感としての呪術 sympathetic magic が発生する。これらは知的覚醒の結果ではない。彼らの生活からの切望と，その感情流出にほかならない。これらの過程は社会的結束とも結びついていた。即ち集団としての行動や感情からにじみでた要請としての感情である。そこでは本来の「個」はいまだみられない。個の自覚は，やがて次のより高次な宗教と発展，合理化 rationaligation されていく。以上が，ハリソンの概略である。

ハリソンは古代人の本性を man of action とみた。その特徴は(一)集団としての行動であり，(二)行動への共感であり，(三)いまだ存在の苦悩を自我の分裂にまで誘うことのない地平である。このような素朴な心情をジェームズのいう sound mindedness と結びつけることはどこまで意味があるか私は問わない。しかしながら抽象化され，合理化された現代人の精神構造も意識の流れとしては前者と変ろうはずもない。human nature を構成する factor としてかかる自我の分析は宗教心情への足がかりを与えてくれると私は信ずる。古代人を man of action とみるとき，そこにあるも

のは感情の流出であり，パトスの流出であり，善悪はいまだ未分化であったろう。自我の流出はあっても，その確立はなかったであろう。ホワイトヘッドはいう。重大なのは儀式的反復が感情を生物学的要求から，自己を独立させるにいたることだと[10]。かくて感情は個を中心に合理化されて，キリスト教，仏教のような高度な宗教が樹立されるのである。ともかくジェームズの sound mindedness も感情の要請である。そこでは自分と神が何の矛盾もなく合一しえて，さらには，宇宙の無限の発展を信じ，これを善しとみて，そのなかにとけこむのである。それは自分と世界を肯定し，拡大していく心情である。あるいは，対象に無限に接近しようとするものともいえよう。前述のサンタヤナの場合も，自己の無限拡大の一例であるといえよう。「健全な精神」は外部にむかうことによって自分をのり越えるのである。人間の要請としてそのような志向は否定できないことをジェームズは認めたわけだ。まさに，意識の流れ stream of consciousness のなかに，かかる健全性が含まれているとみてもよいであろう。言葉をかえればこれは，彼の心理学でいう I と me との対比において述べられるときの I である。即ち主体としての自我である[11]。また G. Allport のように前むきの意図 forward intention といってもよい[12]。ともかく拡大する自我をそこに認めねばならないということである。エマソンが自然をみつめて神性を感じ，サンタヤナが宇宙的背景にたつときに詩は詩であることから宗教になってしまうというような場合，前述してきた拡大する自我との関係をどう考えるべきなのだろう。私はサンタヤナを対称への無限の接近を計る人といったが，それは自個が対象をみつめ，対象をうけとめるだけでなく，対象にはいりこみ，対象との対話の行なわれうる緊張度にまで，その質が昇華されねばならないという意味なのである。そして，まさにこれこそ，ジェームズのいう sound mindedness である。

詩の本質を明確に把握するために次のキーツの言葉をみてみよう。キーツの言葉は詩人の洞察力の vitality を生き生きと表わしている。「詩の特質それ自体についていえば—略—つまりそれは自己というものを持っていないのです。いわば，それは一切であり一切でありません。言葉をかえれば，それは特質というものを持っていないのです。それは光と影を楽しんでいます。—略—詩人は存在するもののなかで最も詩的でないものです。彼は正体というものを持っていないからです。太陽，月，海，それに衝動の動物である男や女の方が遥るかに詩的であり，不変の属性を持っていますが，詩人は何も持っていません。正体がないのです」[13]。これはキーツの豊かな感受性の逆説的表現以外のなにものでもない。この詩論においても，その本質は極度に研ぎすまされた直観的自己の流出，または無限拡大なくしては詩は成立しないということを指摘していると考えてよかろう。ジェームズのいう「健全な精神」sound mindedness と名付けられた宗教感情を私は古代人の生活行動，詩的なるものと宗教的なるものの関係などにおいて，human nature の本質を示すものとして論じてきたのである。

## (4)

さて，ジェームズの sound mindedness をもう一度考察してみよう。まとめてみると次のようになる。

(一) この宗教は幸福と関係をもつ，幸福を感じうるような宗教感情は真実なるものでなくてはならない。

(二) 人生は善なるものである。同時に自然も絶体に善である。

(三) 内的体験としての詩的構成 poetic fiction，即ちポイエシスが重要な要因となっている。

(四) 主体としての自我（I）の本来の姿として，これを考えることができる。意識的に sound

mindedness をひきだすのには，自我の subconscious なる領域を利用しなくてはならない。

(五) 客体としての自我（me）の領域から sick soul が生まれると考えられるが，これは結局主体的自我（I）に吸収されてしかるべきものである。

大体以上のようにジェームズのみた sound mindedness をまとめることができると思う。約言すれば，人は生物学的要請として自我を無限に拡大していくということだ。しかし，同時に人は無限に自己を細断しなければならない。客体としての自我である me は絶体の価値崩壊に直面するわけだ。前者を生物学的要請といったが，後者は倫理的要請というべきものであろう。ジェームズはこれを sick soul と名付けたのだ。真の宗教的心情においては，ジェームズのような区分は必要がないともいえる。前者を追い求める真摯なる精神作用は，必然的に後者の，あの無限分裂につねに直面し，統一か吸収が行なわれなくてはならないから。また後者の分裂した自我は根底に持続的な志向的な自我をもたなくては，分裂そのものが不可能であるからである。悪の存在に意識が固着し，宗教感情は深化されていくのであるが，このような sick soul については，方法上深く立ちいらないことにしようと思う[14]。

sound mindedness と sick soul の相関関係をペリーは意味深く次のように表現している。「人は真剣に人生を漕ぎすすむが，自分の舟が浮んでいる海の，その海流によって完全に，かつ非情にも港にと運ばれてしまうのを承知しているのだ」[15]。港とは自我の分裂をみた sick soul にほかならない。勇ましく漕ぎいでても，安全ではあっても意にそわない避難所としての港に身を休めざるをえない。ペリーは挫折に積極的意味を含ませることがジェームズ自身の姿により忠実であると考えているようだ。しかしながら「信ぜんとする意志」の根底において，それを支えるものとして sound mindedness を指摘しているのでもあるから[16]，ペリーも sound mindedness をより根源的なものとして優先させているとみるべきであろう。

ジェームズ自身が宗教を宗教論の末尾で次のように定義している。この一般的特徴は sound mindedness の機能を整理していくのにも当然参照されなくてはならない[17]。

(一) 可視的世界はより一そう霊的な世界の一部であり，可視的世界はその主な意義を霊的世界から引きだしている。

(二) より一そう高い宇宙との結合あるいは調和のとれた結びつきが，私達の真の目的である。

(三) 祈り，または霊 the spirit との内的交流は，その霊が神であろうが法則であろうが，仕事が真実になされる過程である。霊としてのエネルギーが現象界に流れ入って，心理的物質的な効力を産みしめすのである。

(四) 新しい妙味 zest が，おくりものの如くに生活に加わり，これは誌的な魅力をもち，また誠実や元気をふるいたたせるのである。

(五) 安全という確信や，平和であるという気分がある。他の人々と交際するときに愛の感情が優越する。

このような宗教感情の分析を参考にして，ジェームズの賭けの精神を sound mindedness にみようとするのがこの小論の意図である。ジェームズの sick soul を反省的思惟に結びつけ，sound mindedness を志向的思惟とみて前者は後者へと昇華していくべきものとみるのが妥当であろう。ジェームズもその方向を意図していることはいうまでもない。しかし，両者の統一過程そのものが，永遠にくりかえされ，もつれあう宿命的な両者のからみあいの過程こそ宗教の本態であろう。ただ比重をどちらにかけるかにより，宗教心情は大きく分かれていくのであろう。プラグマティズムがプラグマ（行為）を絶対の社会規範とするかぎり，宗教的心情はますます外化されていかざるをえ

ないわけだ。事実，デューイは次のようにいう[18]。「人が思想と行動のなかにはたらいている統合 union に神の名をあたえてよいかどうか，このことは個人が決めればよいことである。しかし，理想と現実の生きた統合の機能は，霊的な内容をもっているすべての宗教において，神の観念に与えられてきた力と同じものであるように私には思われる。」理想と現実との活動的な関係がデューイにとっての宗教である。ジェームズにおける sick soul はその形骸を完全に消滅してしまった。

アングロサクソン的思考の地平にありながらキリスト教をさらに合理化 rationalize せんとしたホワイトヘッドの宗教論も，ジェームズのいった living hyposesis としての sound mindedness を構成しなおしたものにすぎないであろう。

ジェームズの宗教論をポイエシスの心としての sound mindedness より考察してみたのであるが，のちの機会に残された類型である「病める心」を改めて考察したく思う。

（注）

1) D. Hume, Treatise (by Selby-Bigge), Book Ⅰ part Ⅳ.
2) W. James, The will to believe, 1927 p. 56
3) G. Santayana, Interpretation of Poetry and Religion (Cloister), P. Ⅴ
4) G. Santayana, ibid., P. 3
5) G. Santayana, ibid., P. 289～290
6) M. Knight, William James (Pelican), P. 49
7) W. James, The Varieties of Religions Experience, (Modern Library)
8) W. James, ibid., P. 89
9) J. E. Harrison, Ancient Art and Ritual, chapiter Ⅱ
10) A. N. Whitehead, Religion in the Making, Ch. Ⅰ, ritual and emotion
11) W. James, Psychology, briefer course, Ch. Ⅲ, the Self
12) G. W. Allport, Becoming, (Yale Press) 1960 P. 96
13) ハーバード・リード 現代詩論 (みすず) P. 94～95
14) この小論はジェームズのいう二つの類型としての宗教感情を sound mindedness を中心に考えたのであって，sick soul についてはいずれ独立して考察の予定である。
15) R. B. Perry, The Thought and Character of W. James, (Harvard) P. 254
16) R. B. Perry, The Thought and Character of W. James, (Harvard) P. 254
17) W. James, The Varieties of Religions Experience, lecture ⅩⅩ
18) J. Dewey, A Common Faith, (Yale Press) P. 52